

## 『父の遺言』

2016年08月19日

伊東秀子氏の『父の遺言 戦争は人間を「狂気」にする』を感動と同感をもって読んだ。伊東氏の父は上坪鉄一という人で、恐れられた陸軍憲兵中佐であった。中国戦線で憲兵として辣腕を振るっていたが、敗戦後、シベリアに抑留された。シベリアの収容所を転々とし、1950年に中国撫順の戦犯管理所に移送された。戦犯管理所で中国での罪を認め、1956年に特別軍事法廷で禁固12年の判決を受けた。翌年1957年に釈放され、帰国した。帰国後は、軍人だった父とは思えない、穏やかな年月を送り、家族を愛し孫を可愛がり、1987年に85歳の生涯を終えた。残された遺言書には下記のように書かれていた。「子供たちよ、ありがとう。日本に帰ってからの私の人生は、本当に幸せでした。兄弟仲良く過ごさない。絶対に戦争を起こさないように、日中友好のために、力を尽くさない。父より」。伊東氏は父の遺言から、父の生涯をたどりながら「認罪」に焦点を当て、戦争における「加害」の実態を浮き彫りにし、戦争とは何か、人間として生きるとは、どういうことかを著している。彼女自身、心をひどく痛めながら書いたに違いない。そして、戦争を知らない若い人々への痛切なメッセージを込めている。

私は「反戦平和」を実現しようとしている団体の中で「中国帰還者連絡会」（現在は「撫順の奇蹟を受け継ぐ会」に引き継がれている）が最も真実な言葉と行動を展開していると思っている。それは、戦争責任を深く、重く捉えているからである。敗戦後、ソ連は日本兵と軍属60万人をシベリアに抑留した。その1割の人々が極寒と食料不足と強制労働によって亡くなられた。抑留者の中から969人が戦犯として、中国撫順の戦犯管理所に移送された。管理所は周恩来首相の指導の下、極めて人間的な扱いをし、中国人はコーリャンを食べているのに、白米を食べさせ、病気になれば、手厚く看護してくれた。労働はなく、ゲームや読書を楽しんだ。シベリアと中国での違いを地獄と天国の違いのように感じたという。しかし、ここで、中国戦線で何をしたかを問われ、戦争とは何かを考えさせられた。戦争は人を狂気・獣にする。「殺し尽くす」「奪い尽くす」「焼き尽くす」と言われた「三光作戦」を行った。中国共産党・八路軍の反撃を受け、彼らを撲滅するためにあらん限りの暴虐を行った。731部隊・石井部隊は細菌兵器の研究・製造を行い、使用し、無残に殺害した。戦犯管理所で人道的な扱いを受ける中で、人間の心を取り戻し、中国人も愛する家族を殺された怒りと悲しみに震えていることを知り、身もだえしながら罪責を認識していった。高級将校たちは頑強に国家の命令に従っただけで罪はないと言い張ったが、法廷で、あなたに娘は強姦され、殺されたと激しく告発され、認罪に追い込まれていった。獣が人間に回復していくドラマは凄まじい。死刑はなく、釈放されて帰国した。彼らは中共帰りの「アカ」と言われ、苦境を強いられた。しかし、「中国帰還者連絡会」を結成し、戦争の実態を告白し、反戦平和と日中友好を訴えた。

伊東氏は、父が拷問して死者を出したこと、反抗的な44人を731部隊に移送したと書いた自筆の供述書を読んだ。「最も非人道的な細菌研究の実験に供したものにて、私の中国人民に対する犯罪の最も嚴重なるものと認罪します」と書いてあった。「戦争を絶対するな」「日中友好に尽くせ」という父の遺言は、戦争の残虐な実態に自ら加担した者、中国人の骨髓に滲みる怒りや悲しみを知った者の「魂の底から出た真実」の叫びである、そして「戦争とは、国家が国民に人を殺す行為を強制することである。そしてもっとも重要なことは、『人間が人間でなくなること』を強制する」と書いている。戦争責任の認識があるところで、真の平和が構築されていくことを伊東氏の重い本は私たちに訴えている。